神奈川新聞　2011年（平成23年）6月21日　火曜日

被災地支援の役割もって

1940年代、戦争孤児が周囲の支えでたくましく生き抜く姿を描いた映画「エクレール・お菓子放浪記」が7月16日、横浜で上映される。メーンロケ地は、この撮影直後に被災した宮城県石巻市。地方の誇りを全国に発信しようと多くの県民が参加した、地域をあげての作品だった。被災地支援を盛り上げる象徴的作品でもあると、各地で上映の輪が広がっている。プロデューサーの鳥居明夫は「全国に作品を伝えることで被災地を励ましたい」と語っている。（柏尾　安希子）

「この映画が語るのは、支え合う人の心の優しさ。宮城県民こぞってこのテーマにかかわりながら夢を共有して作り上げました」と語る鳥居明夫＝神奈川新聞社（花輪久写す）

震災前の宮城で撮影

映画「エクレール」横浜で上映

原作は、西村滋の自伝的小説。3年前、宮城の映画配給会社社長である鳥居が、この小説と出合い、製作を決めた。「人の心の情け」に感動したという。

「貧しくても、人々が支え合い歴史を刻んできたことを痛感した。自らの利益のため他人を蹴落とす風潮の中、社会的に弱い立場の人が隅に追いやられ、未来を語れないような今の日本。それと比べ、なんと心豊かなことか」

地域再興に

中小の映画配給会社が相次いで倒産し、製作本数も減るなど日本映画の現状は深刻だ。地方の映画館はつぶれ、都会に集中するシネコンが一人勝ち。鳥居はこの作品を通して、地方の街にもかつてあった豊かな映画文化を再興しようと夢に描いたという。

「エクレール」の一場面。いしだあゆみ（左）と吉井一肇

地元に声をかけ、「製作と上映を支える県民の会」を発足。撮影は昨年10、11月に宮城県内3市2町で行い、地元の約5570人がスタッフや役者として参加した。公開は4月23日に石巻市から、と決まった。

3月10日には都内で完成披露試写会が開かれ、大盛況だった。ところがその翌日、大震災がすべてを壊してしまった。「希望に満ちたスタートを切ったのに。映画の情景は破壊され、出演者の中にはお亡くなりになった人もいます」

数奇な運命

念願だった地元での公開は絶望的となった。しかし震災直後、全国から上映の申し出が相次ぐ。「上映することで支え合う人の心の優しさを伝え、被災地支援の輪を広げたい」と。大変ありがたいことです」と、鳥居は感謝する。

神奈川では、市民団体の「福祉を考える会」とNPO法人「神奈川子ども未来ファンド」が協力し試写会開催を決めた。未来ファンドの青木和雄理事長は「戦争はいけない、平和が大切――という映画のメッセージに感動しました。ぜひとも上映してその主題を伝え、被災した子どもたちを支援したい」と話す。

宮城県で生まれ、数奇な運命をたどることになった「エクレール」。だが鳥居は今、こう思っている。「この映画は、被災地の惨禍を救う役割をもって生まれた作品なのかもしれない。被災地を支える心を全国に広げることで、大きな力になれればと思っています」

◇

横浜の試写会は7月16日午後1時半から、関内ホールで。神奈川新聞の読者30組60人を招待する。希望者は往復はがきに代表者の住所、名前、電話を記載し、〒231−0001、横浜市中区新港2の2の1、横浜ワールドポーターズ6階NPOスクエア内神奈川子ども未来ファンドチャリティ試写会神奈川新聞係へ。30日必着。応募多数の場合は抽選。問い合わせは、同ファンド事務局☎045（212）5825。

◆映画「エクレール」　早くに両親を亡くし、孤児院に入れられたアキオ少年が、刑事や感化院の教師、養母、旅回りの一座といった温かい人たちに支えられ、戦中戦後を必死に生き抜いていくようすを描く。近藤明男監督。出演は吉井一肇、早織、遠藤憲一、高橋惠子、林隆三、いしだあゆみ。